

失恋 <うせこい>

作者：sinshiki

概要：テーマとして『花火』『失恋』『三角関係』を含み短めなショートストーリーです。終わり方が解らなく最後がいきなり……

俺には記憶がない。

ないと言っても数ヶ月程度だ。先月事故に巻き込まれたらしく、事故より前の数ヶ月分記憶がない。

医者は「思い出せないだけで記憶自体はある」と、言っていたが思い出せないのだから、『ない』のとそう違いはない。

皆が知っていることを俺だけが知らないというのは、まるで浦島太郎になったような気分だ。

勉強に関しても例外ではなく、抜けてしまっている。幼馴染の紗奈が、いろいろ助けてくれて居るので、わからなくてもどうにかなっている。

彼女は、甲斐甲斐しく俺の世話をしてくれる。そう、それはもう怖いぐらいに。

ありがたい限りだが、俺の知っている限りどうしてそこまでしてくれるのか、思い当たる節はない。

それでも、困った事もある。俺は、クラスメイトの長谷部さん、——いや、佑香と付き合っていたらしい。『らしい』と言うのは、俺には日記をつける趣味もなく、記憶も記録もないから、伝聞でそう聞いている。

自分の彼女の話他人に教えてもらうなんておかしな話だけだな。

それでも、俺の記憶はぎりぎり、去年一緒に花火に行った事は覚えている。その時はまだ友として幼馴染と三人で行った。

そんな訳で、俺にはその事実に実感がわからない。

学校に向かうための準備をして、着替えをしていると、トントンっと、扉をノックする音が聞こえた。紗奈だろう。隣に住んでいる事もあり、事故以来迎えにきてくれている。

「なお君おはようー 下で待ってるね」

鞆を持ち、紗奈と一緒に学校に向かう。

二人、いつもの通学路を歩く。ほとんど毎日顔を合わせていることもあり、特に話題はない。

「佑香ちゃんとは、どう？」

何か話題を探していた紗奈が、彼女の事について聞いた。

「あぁ、『付き合ってる』って、言われても覚えていないから、いまいちなぁ」

「そうか……思い出せるといいね」

話が続き二人黙る。後ろから走ってくる足音が聞こえた。

「おはよ」

元気良く間に入ってくる。

「おはよう。いつも通り元気だな」

「紗奈ちゃんも、おはよ」

「おはよう。佑香ちゃん、今日の宿題やった？」

「あ～、やってない。うつさせて～。紗奈、おねがいっ」

なんだ、またやってないのか。

「自分でやれよ。紗奈に写させてもらってばかりで」

「ちゃんとやってた時もあるもん。って言っても、覚えてないもんね」

「別にいいよ。なお君だって教えてもらってばかりで」

まぁ、そういう言い方をすればそうだけど。

「そうだけどさ、俺は一応やろうとはしてるじゃないか」

「私だって、やろうとはしてるもん。ただ、やることを忘れちゃうだけなんだから」

それはやろうとしているのか？ なんて、思うが言っても仕方ないのでやめておこう。

佑香は腕を絡め、紗奈は俺を間に挟み佑香と話をしながら、俺たちは学校に向かった。

学校では、よくわからない授業が進む。『後で教えてもらえるから』と、俺は聞いていないことが多い。ノートだけは、取っていないと紗奈に怒られるから、ノートをとるだけの作業。

それが、俺の授業の風景だった。

一日分の授業が終わると、すぐに佑香がやってきた。

「直人、帰ろ〜」

と、現れる同時に叫ぶ。一瞬注目を集めるが、いつもの事かと皆それぞれの雑談に戻った。

俺も、帰り支度をして三人で帰る。

「今年も、花火行こうね。三人で」

俺たちが去年も行った花火大会。

「私は、いいよ。二人で行きなよ」

紗奈は俺たちの関係を気にして遠慮した。当然といえば当然か。

「いいの、私は三人で行きたいからっ。良いよね、直人」

「俺は良いけど」

特に迷う理由もない……ではいけないのだろうけど。俺の中では、三人で仲良く花火を見に行った記憶しかないから、仕方ないのだろうな。

「ね、いいって。明日予定がない事ぐらい知ってるんだから。決定ね」

強引に決定してしまった。佑香はいったい何を考えているのか。

それでも、彼女がそう望むならそれを拒む意味もないし。

「それじゃ、また明日ね」

佑香と別れ、俺たちもそれぞれの家に帰る。

晩御飯の後に、いつも紗奈が勉強をしに来る。勉強をすると言っても、実際にするのは俺で、紗奈は教えているだけだ。

この前「俺を教えていて、自分の勉強もあって大変じゃないか」と、聞いたことがあったが「人に教えているのは復習になっていいよ？」と、言われた。

教えてもらっている俺は、ありがたい限りだからいいけど、「本当に大丈夫なんだろうか？」と、不安になる。

「じゃあ明日、午後六時にね。遅れたら駄目だからね」

そう言われたら、早く来るしかないだろ。と、早く来たものの、俺は一人ぼっちで待ち惚けている。時計を見れば六時十五分を指していた。すでに三十分は待っていることになる。この暑くて仕方ない季節に一人で待つのは辛い。せめて紗奈と一緒にこようと思ったが、何故だか留守だった。

『ごめんね待たせて、もう行くから』

などとメールが来ていた。

それから、しばらく待つと佑香が紗奈を連れて、やって来た。文字どおり、佑香は紗奈の手を引いて。

どうやら紗奈が浴衣を着るのを嫌がったらしい。そういえば、去年もそうやって着たがらなかったな。

すでに、まっすぐ目的地につく事さえ困難なぐらい、人が溢れていた。出店には人が並び、『祭』と言う感じだ。

しばらく何も話さず歩き、休めるようなところを探し見つけるとすぐに、「私、ちょっと何か買って来るね」と言い、紗奈はどこかに行ってしまった。

「懐かしいわよね。覚えてるのかな？」

二人きりになり、突然そんな事を言った。

「あの頃はまだ、私は直人の彼女じゃなくて、私がお願いして三人でここに来たね。ねえ直人、紗奈のこと嫌い？」

話の流れが読めず、俺は戸惑う。

「嫌いな訳ないよね。ただ近すぎてわからないだけだもの」

俺の返事を待たずに佑香は続ける。

「私、もう辛いよ」

「ごめん」

何を言われているのか、ようやくわかった。今日はそう言うことで無理矢理にでも来たかったのだと。そう思うと、急に気が重くなった。

「確かに、そのことも辛いけど、それよりも辛いことがあるの」

そこで区切り、佑香が俺の正面に来て、告白するかのように、覚悟を決め続きを言う。

「あのね、去年ここに来た時にはもう、紗奈が直人のことを好きなのを知ってて、花火に誘

って、それであの子から直人を奪ったの」

「でもそれは……」と俺が話すのを遮りさらに言う。

「その後、偶然の事故でこうなっちゃって、はじめはどうしようかと思ったの。この恋は無かったことにして、紗奈に譲ろうと考えたの。だけど紗奈は良い子だから、直人に私のことちゃんと言って、関係が続くようにって」

確かに、そうだ。記憶を無くして一番初めに言われたのは、長谷部 佑香は直人の彼女だからと。

「私だったらその隙に、直人を奪おうとしたと思うの。でもね、紗奈は記憶を無くした直人の世話をしながらも、自分の気持ちを押し殺して続けたの。そして、直人の為にいろいろ頑張ってる。だからわかったの、本当に直人のことが好きなのは紗奈なんだって。私は今だって、直人のこと好きだよ。でもそれは紗奈にはかなわないなって。だからさ、直人。もう良いよね？」

そう言い終わると、佑香は居住まいを正した。

「長谷部 佑香は伊井 直人をふりました。また、友達としてよろしくね。もちろん応援してるから」

言い終わると、「すぐに俺に背を向け歩き出す。

啞然としていて一步出遅れた俺が追いかけてようとした。

けども、

「駄目来ないで。いいの、これで……これで」

彼女は、走って行ってしまった。俺はただそのうしろ姿を見送ることしか出来なかった。

一人残された俺はただただ立ち尽くすだけ。

それから少しして紗奈が血相を変えて走って来る。

「どうしたの？なお君。佑香さんが突然『直人君をよろしくって』

「あぁ、ふられたよ」

「え、え？」

戸惑い驚く紗奈、解らなくて普通だろう俺ですら、状況を飲み込めてないのだから。

「どうして……」

二人立ちつくすそこでは去年と変わらず、花火の音が鳴り響く。